ぼくたちは　やくそくしたくても　できなくなるのだから

「私の声を奪うな
私をいなかったことにするな」。

全身の筋力が徐々に弱まり、病状の進行によっては声も失われ、意思を通わせることもむずかしくなる難病ALS（筋萎縮性側索硬化症）。病を発症し、生死のはざまに揺れる一人の女性が、生を証しするように詩を綴る。ある日めぐり合う、同じ病を生きる先行者。「私もいまも迷いの中にいます」。声を失った男性は、透明な文字盤を介し生きることを一緒に考えたいと告げ、ふたりは長い旅をはじめる。3年半にわたる別れと出会いを、映画スタッフはともにする。
やがて「身体に閉じ込められる」かのように、眼の動きも微かになる日――。それでも呼びかける者たちを支えているのは何だろうか？

“私”を失いつづける日々に、
言葉がのこされる。
言葉も失われた先で、
人はいのちに触れる。

人間が「生きる意味」は、もしかしたら、
人と人とのあいだに灯るのかもしれない。
その人肌ほどの火種があれば、
きっと、人は絶望という闇に抗える。
どうか、静かな呼吸で観てほしい。
この映画が、観る人とのあいだに灯そうとしているものを、
全身全霊で感じ取ってほしい。

――荒井裕樹〈文学者・文筆家〉

ＡＬＳとは？ ALS（筋萎縮性側索硬化症）は、手足やのど、舌、呼吸を動かす筋肉が徐々に痩せていく病気です。進行の速度は患者さんによって異なり、発症からの余命は3～5年と長らく言われてきました。しかし、現在では呼吸器や経管栄養などが発達し、数十年にわたって在宅療養をしながら自分らしい生活を送る患者さんも増えています。

杳かなる――木の下に日が沈み
「杳」という漢字は、日が木の下に沈む様をあらわし、暗くてはっきりしない、奥が深い、はるかに遠いという意味があります。進行性の難病を生きることはこの字があらわすように、ときに先の見通しのない絶望の日々です。絶望の淵に佇ち、ふさぎこんで声も出ない人は何を思うのか。“死に方”をめぐる議論が先鋭化するいま。誰かと今日の暮らしを折りかさねる先に、ひらかれる明日が見えてきます。

監督・構成・編集：宍戸大裕／撮影：高橋慎二／音楽：末森 樹／整音効果：永峯康弘／ナレーション：寺尾紗穂／主題歌：『たよりないもののために』（作詞・作曲 寺尾紗穂）
宣伝デザイン：アルビレオ／宣伝写真：澄 毅／企画・制作：映画『杳かなる』製作委員会／お問合せ：映画「杳かなる」上映委員会／公式HP：http://harukanaru.com/

2025 8/24（日）エルパーク仙台 6階ギャラリーホール

上映時間　1回目10：30～　2回目14：00～

＊1回目の上映後、監督の舞台挨拶を予定しています。

鑑賞料金1000円　申込み：ALS協会宮城県支部HPから　申込み締切り：8月20日

https://www.miyagi-jalsa.org/index.html

〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町４丁目１１－１
Tel：022-268-8300

杳かなる（はるかなる）

闇夜のような日々――
沈黙を照らすものはあるか？

進行により全身不随にいたる難病ＡＬＳ（筋萎縮性側索硬化症）
喪失と絶望のただなかを歩く人たちの　いのちの旅

監督：宍戸大裕　ナレーション・主題歌：寺尾紗穂

制作：映画『杳かなる』製作委員会　2024年/日本/カラー/124分/ドキュメンタリー